

霞ヶ浦の村里に春がいつ来るかと思っていたら、垣根の梅も花を咲かせたという意であろう。

春立ば霞の浦の海士人は

桜貝をやまず拾ふらん

春が来ると、霞ヶ浦の漁師たちは桜貝をまず拾うことによって、漁業をはじめるといふ。桜貝は淡紅色の美しいもので貝細工などに使われる。

桜川瀬々の白波しげければ

霞うながす信太の浮島

桜川の瀬々の白波と信太の浮島とを巧みに歌いこんでいる。両方とも名所であるし、桜川の瀬々の白波と信太の浮島を組合わせたところが面白い。

宗祇は応永二十八年（一四二一）から文亀二年（一五〇二）までの人で、連歌文学の完成者である。もちろん和歌にもすぐれ、「名所千句」と題する歌集がある。

「名所千句」というところから、景色のよいところ、歴史的に名高いところを選んだもので、実際には訪れていない場合も考えられる。

とどまらぬ春の奈さかの海もうし

かすみの山の末りすき空

香澄は今の麻生町で、霞ヶ浦の湖岸でもあり、霞にけぶっているが、それ以上にその名の通り香澄の山の空も

一面霞におおわれているようすを歌っている。

難面てあはれこの世のなみの上に

たてるや誰も浮島の松

この歌は浮島の松をよんだと詞書がある。霞ヶ浦に浮んだ浮島には松が茂っている。

以上が鎌倉、室町時代の文学の中の和歌に歌われた霞ヶ浦のようすである。前述したように、霞ヶ浦を訪れてよんだものは少なく、通りいっぺんにその名を用いたようにも思われる。それでも霞ヶ浦という所についてのイメージはよく表現されている。

常陸の国府（石岡市）に勤務した役人、訪れた人々は筑波を訪ね、また霞ヶ浦を眺め、その美しさに感動して京に帰り、その話をし、それが歌の題材として、とりあげられるようになったと考えられる。

また「常陸国風土記」にもその四季の美しさが描かれているし、古来、霞ヶ浦は歌枕として、和歌に歌いこまれる場合も多かった。とくに筑波山頂からの眺めは遠望もきき格別であった。

（文学研究家）